

日本図の変遷

～赤水から伊能へ～

小野寺淳 平井松午

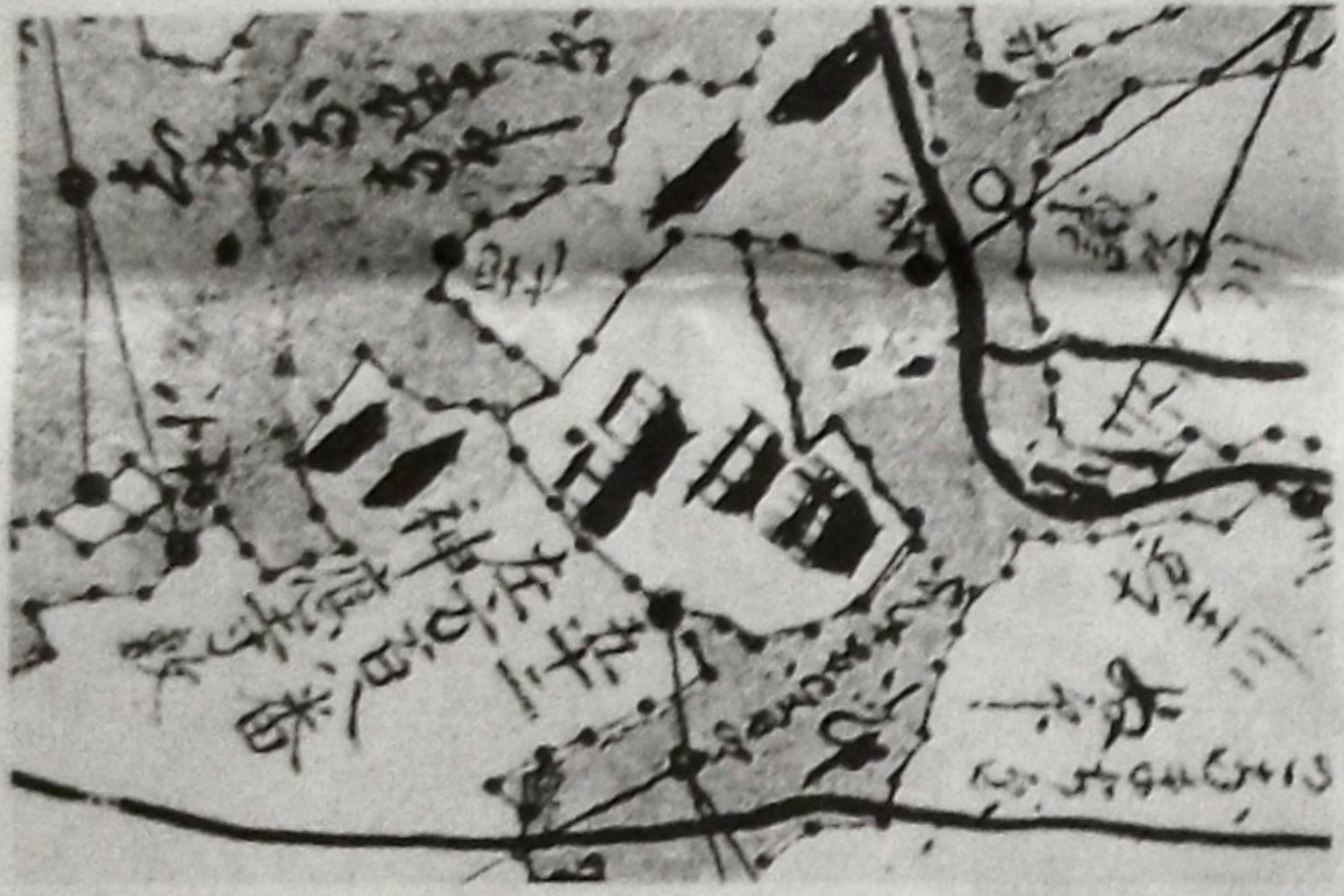
3

ひらい・しょうじ 1954年、北海道帯広市生まれ。徳島大名警教授。日本地理学会会員。専門は歴史地理学。

実測日本図といえは、伊能図を連想される方が多いかもしれない。しかし、伊能忠敬が全国測量を開始する五十年以上も前に、琉球王国（現在の沖縄県）では実測地図が作製されていた。「間切島針図」である。

実測地図の登場

一七三七～五〇（乾隆二一～一五、元文二～寛延三）年（琉球王国は、清国と日本の元号を併用）に田島の面積・収量調査を目的に実施された乾隆検地（「量地法式集」には「元文御検地」とある）では、行政単位となる「間切」や「島」を単位に「針図」と呼ばれる一分五間（約九・八五尺、一間は六尺五寸、縮尺約三千二百五十分の一）の測量地図が作られた。沖縄諸島の約一



大きめの●が印部石と測量基点の番土手、小さい●が測点を示す。白地部分が田島屋敷。「真和志間切針図」部分（一般財団法人沖縄美ら島財団蔵、安里進氏提供）

に測量地点ごとの方位角や距離を測って針図＝写真＝を作製した。針とは方位磁石のことで、全円を三百八十四分割し、方位角を「子小間左少上寄」などと表記。三六〇度換算にすると「子」は三〇度、「小間」は七・五度、「左」は三・七五度、「少寄」は〇・九三七五度を示す。

伊能忠敬の測量は、十八世紀半ばに広がりをもせた紅毛流規矩術（オランダ流測量術）をベースとし、基準点を設けずに海岸線や街道の形状を測る道線法（導線法）が用いられた。これに対し、乾隆検地の測量法は、当時フランスのカッシニらが考案した三角点網を用いた測量法に近い。沖縄県立芸術大名警教授の安里進氏によれば、琉球の針竿測量は、自国の測地事業にフランス流の測量法を取り入れた清国を介して琉球にもたらされたとみられる。その中心となったのが、三司官（高官）として琉球王国の行政改革を進めた蔡温（一六八二～一七六一年）であった。

「間切島針図」を縮小接合して「間切図」が二十五枚ほど作製された。のちに、これらの間切図と「首里古地図」「那覇古地図」などを接合して、一分二百間（約三百九十四尺、縮尺約十三万分の一）の「琉球国之図」（旧名「薩摩藩調整琉球図」沖縄県立図書館蔵）が編集されたとみられる。

伊能測量と乾隆検地では、その目的や対象地域、測量法は異なるものの、十八世紀半ばになると、より「正確な地図」が希求されてきた。本連載の後半では、伊能図を取り上げ、伊能忠敬の地図作りをみていきたい。

2022年10月25日

東京新聞